



新曜社
4515円

越境する書物

和田 敦彦著

リテラシーという言葉が単なる「読み書き能力」という意味を超え、さまざまな分野での「読み解き」として問われる時代である。読書環境が激変する中、書物が「そこ」にあること自体の不思議を捉えた本書は、時間軸や空間を超え、資料をつなぐ役割を担った人や組織を中心に追跡する。壮大なロマンを秘めた調査研究である。

まず「越境する書物」の背景、特に戦争を機として米国へ渡った蔵書のルートが示される。代表的なのは占領期に接収されたフラング・コレクションで、そこにある政治的、社会的な意図をくむことが必須である。

また国内では資料劣化を防ぐことが主眼だった「明治期刊行図書マイクロ版集成」が、米国の学術図書館にとってオリジナルよりも優れた「商品」になったなど、資料の変容は興味深い。

著者の目は、実際にフィルムを

読書

壮大なロマン秘めた研究

作成した末端の人々や過程までを緻密に追う。さらに著作を記した人ではなく、読書の場を与えた人々への言及がある。

図書館員の仕事は黒子のな得御だが、「彼、彼女たちは、書物を書き、読むという日々の中の私たちの行為そのものの一部として永遠に息づいている」という文は、元図書館員として感慨深い。一般的には見落とされる事象や人々への正確な日配りは、この書に通底する。

そして今や避けて通れないデジタルライブラリーの問題。著者は優れた可能性を見いだすと同時に、特定企業の占有に警鐘を鳴らす。

ここでも問われるのは、データベースのあり方などへの批判的な目を養成すること、つまりデジタル情報のリテラシーである。

「この本が、世界に存在すること」(角田光代著)のタイトルを借りよう。なぜこの書がここにあるのか、もう一度われわれが立つ「知の基盤」を見直す、リテラシー史という新分野の端緒となる書である。

(大島真理・エッセイスト)

※著者は1965年高知市生まれ、早稲田大図書館副館長、著書に「書物の日米関係」など。